

アルマイトの弁当箱

「二十四の瞳」と「太陽の子」と「橋のない川」。思想的な傾斜がきつく、評価の分かれるところもありますが、まだ読んでいない先生にはぜひ読んでもらいたい作品です。中でも「二十四の瞳」は大好きで、小学校の時に読んで以来何度も読み返してきました。貧困と戦争に翻弄されながら懸命に生きようとする子どもたちの姿と、子どもの幸せを奪う社会悪に敢然と立ち向かう女性教師の生き方を描いた作品です。

今日は、登場人物の「松江」のことを書きたいと思います。松江の家は貧乏で学校へ父親の柳行李やなぎごうりの弁当箱を持ってきていました。それを「小ツル」や「ミサ子」にからかわれ、母親にアルマイトの弁当箱をねだります。母親は「不景気でとても今は買ってやれないが、来月になれば買ってやれる。」と苦しまぎれに話します。喜んだ松江は「お母さんが起きられるようになったら、アルマイトの弁当箱、こうてくれるん。ふたにゆりの花の絵がついとるべんと箱。」と大石先生に話しました。

母親は産後の肥立ちが悪く、生まれたばかりの妹を残して亡くなってしまいました。妹の世話で学校に來れない松江のために大石先生はアルマイトの弁当箱を買い、「マツちゃん、これ、ゆりの花の弁当箱よ。あんたが学校に來られるようになったら、つかいなさいね。」と渡しました。松江は小豆島を離れ住み込みで働くことになり、その弁当箱を持って学校へ通うことはありませんでした。

二十年以上の時が経ち、再び岬の分教場に赴任した大石先生の歓迎会が開かれた時、松江はアルマイトの弁当箱を皆に見せてこう言います。「わたしはもう先生の前に出られるような人間ではありませんけれど、でも、たとえどんなにけいべつされても、わたしは先生のこと忘れませんでしたの。あの弁当箱、いまだって持ってますから大事に。」「なあ先生、わたし、あの弁当箱、戦争中は防空壕にまでいれて守ったんです。あの弁当箱だけは、娘にもやりたくないんです。わたしの宝でしたの。」松江は戦争の混乱の中言い表せないほどの苦勞をし、人に蔑まれるような人生を送っている。その松江をアルマイトの弁当箱は支え続けたのでした。

「弱く恵まれない子の力になれるのならば。」という気持ちで、わたしは教員をめざしました。学校に來れない子、非行を繰り返す子、貧困にあえぐ家庭の子、「とり残されそうになっている子ども一人一人に手を差し伸べる教員になれ。」という先輩の言葉に従い、教員を続けて來ました。定年を間近に控えた「男先生」の年齢に達した今、わたしは弁当箱を子どもたちに渡すことができたのだろうかと思います。

※アルマイト…アルミニウムの表面を酸化処理したもの

